

# 日本語と中国語の受身表現の比較

## ——教科書の分析をもとに——

崔 海燕

この修論は、受身表現の指導法について一提言をするものである。

日本語も中国語も同じく受身という文法形式が存在する。しかし、その意味・用法は異なる表現をとることが少なくない。

中国語の場合の受身文（「被」字句と読む）は迷惑と被害を受けた場合に限られる。それに対して日本語の受身文の使用範囲は迷惑と被害の場合だけではなく、利益の場合（例えば、「先生に褒められた」）にも使われている。従って、日本語の受身文を中国語に翻訳すると、通じない場合が多い。多くの中国人日本語学習者は母語の干渉で、中立的意味を表す出来事を表現する時、受身文より能動文のほうを用いることが多い。著者もその中の一人で、日本語学習過程で受身文には苦労した経験がある。つまり、一般的に中国語話者にとって、日本語の受身表現の習得は日・中の受身形態と用法の相違により、難解なものである。従って、本論は、中国人日本語学習者を対象とした日本語の受身文の効果的教え方について述べたものである。

日本語教育における受身表現の指導は一般に日本語の教科書の文法の受身表現に基づいてなされている。本論では、まず、先行研究を資料に、日・中の受身形式の相違を考察し、次に双方の教科書における受身表現の取り扱い方を分析する。具体的には、日・中の教科書にある受身例文を全部取り出し、日本語教育の観点から、教科書の例文を大きく直接受身と間接受身二つに分け、さらに、直接受身を3種類、間接受身を2種類に分けて考察した。

次に、受身表現の実際の使われ方について、日本語母語話者を対象に行ったアンケート調査をもとに考察した。アンケートの20問は、日・中の教科書の例文の中から取り出したものである。例えば、日常生活でよく使われてい

るもの、或いは多くの教科書に取り扱われているもの、又は内容が似たような例文を選んだ。A受身文とB能動文に分け、被験者にAとBどちらをよく使うかを問うた。

中国語と日本語は、文法の面でも用法の面でも多くの相違点があり、受身もその中のひとつである。日・中の教科書の例文とアンケートの分析結果から見ると、以下のことが言える。

初級日本語学習者には、実際のコミュニケーションに応じて教えることから考えれば、現在初級で教えている文法項目の中には、初級レベルで教える必要のないものが多い。受身表現もその1つである。

例えば下記の例文であるが

- ① 子供のとき、よく母にしかられました。

(『みんなの日本語初級II』 p.94)

上記①の例文の内容は、②のような能動文でも伝えることが十分に可能である。

- ② 子供のとき、よく母が私をしかったです。

②の例文は日本語としては少し不自然であるが、コミュニケーション上では、あまり問題がない。それでも②のような日本語は不自然だからやはり受身を教えなければならないと考えるのは、母語話者の視点からの発想である。「日本語らしさ」を初級の学習者にまで求める必要はないのではないだろうか。初級の段階から厳しく正確さを必要以上に求めなくてもいいのではないだろうか、考え直してみる必要がある。

中級レベル（かなり複雑な複文を自分で使える）になるまでは、受身文を使わなくても、実際のコミュニケーションに困ることはあまりない。また、受身文のように難しい文法項目を教えても、すぐに使えるようになるわけではない。中級や上級まで進まない学習者も多いので、将来の基礎のためとってすぐに使うわけではない受身文を導入するのは必要がない。初級では受身文を扱わないほうが、学習者の負担も少なく、効率的である。

特に著者の行ったアンケートの結果では、間接受身の中で自動詞の受身はほとんど必要がないという結果が出ている。持ち主の受身に関しては日本人母語話者の使用率が高いが、「隣の人に足を踏まれた」という文を「足が踏ま

れた」としても意味は十分に通じる。複雑な間接受身の構文「～を～された」としなくても、中国人にとっては、受け入れやすい直接受身として教えることができるのではないか。

本論での研究を今後中国人への日本語指導に役に立てるように努力をしたい。

これからも、中国人日本語初級学習者を対象として直接法でいかに発話能力を向上させるかという点で成果をあげたい。また、中国人日本語初級学習者を対象とする教授法に焦点を当て、研究を進めたい。近年、中国では日本語学習者が著しく増加している。しかし、四技能中の読み、書きは問題ないが、聞く、話すは弱い。一番大きな原因は日本語を話す機会がないことと、勉強した日本語をすぐに使える環境がないことである。従って、発話能力の向上にも有効な直接法を確立し、中国人教師にとって有効な教材を考案することを目標としたい。そのためには実際の会話で使用頻度の高いものを中心に、効率のよい指導が必要である。日本人話者でさえあまり使っていない難解な文法項目を思い切って省き、特に初級では、必要なものに限って教えるようにするべきである。

本論では受身表現を取り上げたが、その他の文法項目も取り上げて、日本と中国の日本語教科書を分析し、中国人日本語学習者を対象とした効果的教育法を探し出すことが今後の課題である。